

オペレッタ狸御殿

2005(平成17)年5月29日鑑賞〈梅田ピカデリー〉

★★★



監督＝鈴木清順／出演＝^{チャン・ワイイー}章子怡／オダギリジョー／薬師丸ひろ子／平幹二郎／由紀さおり／高橋元太郎／山本太郎／篠井英介／市川実和子／パパイヤ鈴木／美空ひばり（デジタル出演）（日本ヘラルド映画、松竹配給／2005年日本映画／114分）

第2章

モテないあなたも映画で疑似恋愛

……「狸御殿映画」は日本では数多いが、それは昔の話。またオペレッタというのも解説が必要。そんな時代にいくらアジアン・ビューティーの代表（？）^{チャン・ワイイー}章子怡を主演として起用し、狸をオモテに出しても、「本当にヒットするの？」というのが正直な予想だったが……？ 結果はやはり、鈴木清順監督の遊びすぎ……？ 一般的に悪くはないものの、特に感動もなし。もっとも、子供連れの家族は喜んでいたので、私がオヤジになりすぎてしまったのかも……？



狸御殿映画とは時代錯誤……？

この映画は、1923年生まれ鈴木清順監督と1918年生まれのプロダクションデザイナーの木村威夫氏を中心となって製作されたことが、パンフレットでの2人の対談を見ればよくわかる。さらにパンフレットには佐藤利明氏（娯楽映画研究）による「ザッツ・狸御殿ムービーズ！」という、「連綿と続いてきた日本の狸御殿映画」についての詳しい解説があって面白い。要するに、日本では、「狸御殿映画」は①戦前から戦中にかけての「狸御殿」事始め、②戦後復興と「狸御殿」ムーブメント、③宝塚と昭和30年代の「狸御殿」、④昭和から平成の「狸御殿」、と続いてきたというわけだ。

そういえば、私も1950年代の小学生の頃、両親に連れられて「狸御殿映画」を観た記憶がある。しかしなぜ、多種多様な娯楽が腐るほどあふれているこの平成の時代に狸御殿映画……？

オペレッタも時代錯誤……？

パンフレットには「オペレッタとは？」という囲い込み解説があるが、こんな解説を入れなければならないということはすなわち、今どきの若者には「オペレッタ」という言葉は通用しないということ。言うまでもなく、オペラもオペレッタも外国で生まれたものだが、日本ではオペラという形式の音楽劇はなかなか定着してこなかった。私もよくは知らないが、昔「浅草オペラ」というのがあって、それが一世を風靡したことは映画などを観て知っているが、今さら特にオペレッタでもないだろう……？

今回この「狸御殿映画」や「オペレッタ」が生まれたのは、映画監督として50年を迎えた鈴木清順監督がちょっと昔帰帰(?)をした結果のアイデアによるもの……？ しかしそれって、かなり時代錯誤では……？

キーワードは「狸と人は恋におちてはなりませぬ」

狸御殿映画の、そしてこの映画のキーワードは、「狸と人は恋におちてはなりませぬ」。このキーワードをめぐって展開される、人間の王子さまと狸のお姫さまとの恋愛絵巻の行方や如何……？というのがこの映画のお楽しみ。また、その背景の設定は、一方では何となくシェイクスピアの『リア王』を連想させる重厚なものだが、他方で「世界で1番美しいのは誰じゃ」と問いかけるストーリーは、ディズニー映画の『白雪姫』(37年)のバージョンとなっている。そして「狸御殿」はわかるとしても、「がらさ城」や「快羅須山」など、ワケのわからない架空の世界をつくりだしているのが少し難点……？

映画というよりは舞台のような感覚で、役者にも観客に向かって直接演じさせるような鈴木清順監督映像による時代絵巻はたしかに豪華絢爛で夢の世界に導くもの。そして、「おとぎ話」だと割り切って楽しめば、それなりに楽しいもの……？

日中友好のために脚本変更……？

『オペレッタ狸御殿』が成功するかどうかの最大のポイントは、ヒロイン選び。

パンフレットにも、鈴木清順監督が言っていた「狸御殿てのは、その時代の一番のスタアが主役じゃなきゃ駄目なんだよ」格言が重くのしかかり、狸姫選びが難航したことが書かれてある。そこで彗星の如く現れたのが章子怡^{チャン・ツイイー}。『HERO（英雄）』（02年）のクランクアップ翌日、北京で章子怡^{チャン・ツイイー}と面談して、この映画への出演が決まったらしい……。しかし、章子怡^{チャン・ツイイー}にいくら日本語を勉強させても、そりゃ、かつての日本映画のお姫様スターによる狸御殿映画と同じようにいかなのは当然。そこで急遽浮上したのが、「唐の国からやってきた狸姫」という設定で、その結果、日中友好の狸姫という脚本に切り換えられた……。こりゃウソのようなホントの話……？

唐の国からきた狸姫の美しさは……？

私は章子怡^{チャン・ツイイー}の大ファンだが、何といても『初恋のきた道』（00年）の彼女が1番好き。そして2番目が『グリーン・デスティニー』（00年）、3番目が『武士（MUSA）』（01年）、4番目が『HERO（英雄）』と昔の作品がよく、最近の作品になるにつれて評価が厳しくなっている。『LOVERS』（04年）はまずまずだったが、今回の『狸御殿』は……。そして現在製作中の『SAYURI』は……？

そもそも日本映画の時代モノは当然ながらみんな着物を着て、日本的な化粧（？）をしているから、どうもみんな同じように見えて、せっかくの美女でもその魅力が引き出せないものが多い。さすがにこの映画は鈴木清順監督のお遊びオペレッタ（？）だから、その点はかなり工夫しており、服装も純粹時代劇とは違うものになっているが、それでも着物姿では章子怡^{チャン・ツイイー}の魅力はもうひとつ……。狸姫の乳母となる薬師丸ひろ子も一貫して濃い化粧をしたままだから、美しさなど全然感じられないし、表情の面白さもイマイチ……。唐の国からきた狸姫は潜在的な魅力はいっぱいだが、時代劇であるため、その魅力の引き出し方が不十分で不満……と感じるのは私だけだろうか……？

音楽スタッフは？

この映画はオペレッタ。そしてその中で歌われる楽曲は全部で13曲。パンフレットには音楽プロデューサーとして北原京子、音楽担当として大島ミチル、白井

良明と書かれているが、多分大島ミチルがその中心だろう。そして、私が映画評論を書き始めてからいつも目にする名前だと思って最近注目している音楽家がこの大島ミチル。その映画音楽の製作量がすごいうえ、日本アカデミー賞では、第21、24、26、27回で優秀音楽賞を獲得しているとのこと。この映画で歌われる楽曲はそれなりにわかりやすいメロディーで、それぞれの場面にふさわしい音楽になっているのはたしか。しかしそうだからこそ逆に、どうしてもこの映画のための音楽という限定がつくことになって、なかなかスタンダードナンバーとして歌われることにならないのでは……？

『ウエスト・サイド物語』の『マリア』、『サウンド・オブ・ミュージック』の『ドレミの歌』、『キャッツ』の『メモリー』など、歴史に残るミュージカルには必ずスタンダードナンバーとして後々まで歌い継がれる名曲があるが、果たしてこのオペレッタでは……？

平幹二郎の『私は神になりたい』や由紀さおりの『びるぜん婆々のマイウェイ』は、それなりの人生観(?)を歌った立派なパーソナリティを持った歌だし、チャン・ツイイー章子怡の『いつか王子様と……』やチャン・ツイイー章子怡とオダギリジョーが中国語バージョンと日本語バージョンで歌う『恋する炭酸水』もすごくわかりやすい歌だが、これが一般の音楽市場でヒットするとは到底思えない……。それはなぜかというと、この映画がちょっと茶化しすぎたものだから……。せっかくこれだけの俳優と音楽家を動員しているのだから、もう少し真面目な感動作を、と思うのは筋違いだろうか……？

美空ひばりのデジタル出演は？

私が小学生の時に観た「狸御殿映画」は、ひょっとして美空ひばり主演の『七変化狸御殿』(54年)や『大当り狸御殿』(58年)だったのかもしれないが、その美空ひばりも今は故人。そして5月29日にはTBS50周年ドラマとして『美空ひばり誕生物語〜おでことおでこがぶつかって』が上戸彩主演で放映されたが、これは今や美空ひばりは完全な「歴史上の人物」になったことを示すもの……？

ところが、この映画ではこの美空ひばりが「デジタル出演」とやらで出演している。こりゃいったいどんな形で……。まあ、1度ホンモノのスクリーンで、

その「デジタル出演」を体験してもらえばいいが、私としてはどうも……？

失礼を承知であえて言えば、こういう発想は、鈴木清順監督が「幼児回帰」していることを示すものではないのだろうか……？

老人と子供向け娯楽作品と割り切ればオーケー……？

私がこの映画に不満なのは、特に感動するものがないということだが、「もともこの映画はそういうことを目指したものではない」と言われればたしかにそのとおり。現に私は公開翌日の日曜日の昼間にこれを観たのだが、観客は子供連れと夫婦50割引を活用した(?)と思われる年配の夫婦連れが圧倒的多数。パンフレットにも、鈴木清順監督は木村威夫氏との対談で、「お年寄りも楽しめます。若者も楽しめます。小学生も楽しめます。赤ん坊も楽しめます。どうぞ劇場へ」と発言しているが、意地悪く読めば、ここでは中年おやじはターゲットとされていない。つまり、「理屈の多い中年おやじには、そもそもこの娯楽映画は不向き」と監督自ら認識しているのだろうか……？

さらに、この鈴木発言を受けた木村威夫氏は、かわいい子ダヌキ3匹が出てくる場面を説明したうえ、「完全に反リアリズム、反自然主義だね」と発言。そして「そういう意味では老若男女いろんな方が見ていいんじゃないですか」と発言しているが、そう言われると、俺は男だが、「老」ではなく中年おやじ。そしてリアリズムにこだわるため、所詮こんな娯楽映画には向かないとされているのか、とついひがんでしまったが……。

第58回カンヌ国際映画祭では？

2004年5月の第57回カンヌ国際映画祭では、『誰も知らない』(04年)の柳楽優弥君が最優秀男優賞を受賞するというビッグニュースが流れたが、今年5月の第58回カンヌ国際映画祭では、日本からの出品作品である小林政広監督の『バッシング』(05年)は賞を逃すことに。

しかし大受けだったのが、特別招待作品として上映されたこの『オペレッタ狸御殿』(05年)だったと5月31日付毎日新聞夕刊は紹介している。

ちなみに、フランスには狸はおらず、英題は『PRINCESS RACCOON (アライ

グマ姫)』とのこと。また批評も「素晴らしい、天才的で、セクシーで、おかしい」(ニューヨーク・タイムズ)と書かれるなど大好評らしい。そして主演のチャン・ワイイー章子怡と並んで赤じゅうたんを歩いたタキシード姿の鈴木清順監督は、「注目を浴びるのは恥ずかしいね」といつもながらひょうひょうと振る舞った、と紹介されている。

ここまで楽しむことができれば鈴木清順監督も大満足……？

続々と続く清順讃歌……？

カンヌでの『オペレッタ狸御殿』の上映が大好評だったことは、次々と報道される新聞記事を見れば明らか。6月2日付読売新聞夕刊では、河原畑寧氏は「カンヌの清順」と題して、この映画と鈴木清順監督がカンヌの観客にスタンディング・オベーションで迎えられたことを解説している。

とりわけ、会場がコンペ参加作を上映する堅苦しい(?)正装を要求される、リュミエール大ホールではなく、くだけた雰囲気で見ることができるとプニュエル劇場だったことがよかったらしい。そして、「中心は若い観客で、チャン・ワイイー章子怡の美しさに溜め息をつき、平幹二朗扮する安土桃山の珍妙なメーキャップに笑い、由紀さおりのびるぜん婆の歌のうまさにしびれ、金色の観音さまのデジタル・イメージで出現する美空ひばりに驚き、清順監督と匹敵する古狸である木村威夫美術監督の能舞台や山水画を使い回すケレンに目を回しながらも、大いに楽しんでいた」と書かれている。

この評論の見出しは、『『わからぬ映画』若者支持』というものの……。いかにもピッタリの見出しだが……？

2005(平成17)年6月4日記

山東省旅行記その3——泰山と華山

・五岳と泰山

「中国に五岳あり」と言われている。五岳とは湖南省の衡山（南岳）、河南省の嵩山（中岳）、陝西省の華山（西岳）、山西省の恒山（北岳）、そして山東省泰安の泰山（東岳）だ。泰山は五岳の中でも最も重要な山と認識され、その御来光を拝む中国人旅行者が絶えないが、それは「封禪の儀式」によるもの。はじめて中国を統一した秦の始皇帝が、BC219年に皇帝の正当性を示すために天地に祀った儀式が封禪の儀式で、それを行ったのがここ泰山なのだ。以降泰山は聖なる山とされ、歴史上72名の皇帝がこれを行ったとされている。

・泰山は1545m

この聖なる山泰山への登山人気については、テレビでも放映された。頂上の玉皇頂や日観峰から拝む御来光は天候に左右されるため必ず拝めるわけではなく、快晴の日に当たった人はラッキー。今回私たちは昼間の登頂だが、秋晴れの快晴の空の下少し汗をかきながら美しい景色を満喫することができたのは何とも幸運！ その頂上は海拔1545mだが、岱廟から7412段の石段と全長9kmの道のりを一段一段歩けば、所要時間は6～7時間とのこと。

・陝西省の華山は？

五岳の1つに登頂しただけでも素晴らしいことだが、私の自慢はもう1つ、陝西省の華山にも01年8月に登頂したこと。これはツアーではなくプライベート旅行だが、男女4人でリュックを背負い噴き出る汗をふきふき約5時間をかけて一步一步急な石段を昇った。石段の幅は狭く、時に鉄の鎖に掴まりながらの登山はスリル満点！ 北峰、東峰に続いて南峰の頂上2160mに到達した時の満足感は何とも言えないもの。五岳のうちの泰山と華山の2つを「制覇」した坂和弁護士雄姿を2枚の写真でタップリと……。

2005（平成17）年10月29日記

